

計画的行動理論を応用したこどもと学生で創る健康づくり

徳永龍子*¹, 武 敏子*², 川上典子*³, 岩崎房子*⁴

要 旨

目的：児童や仲間（家族）が食事、運動などに対する正しい知識を身につけ健康づくりを促進するために学生を指導し、その知識を児童に伝え、児童が仲間に伝える方式で学生、児童、仲間の協同の教育効果を目的とする。事業は、計画的行動理論の「やる気」の3条件である「行動への態度」、「主観的規範」、「行動コントロール感」から考察する。

方法：学生が、生活習慣の確立時期にある小学4年生105名と生活習慣病の発症時期にある仲間（両親等）210名を対象に、食事と運動等をテーマとして2004（平成16）年9月25日健康教育を実施した。また、健康教育実施前の2004（平成16）年9月16日と5ヵ月後の2005（平成17）年2月25日に健康行動アンケート、および2ヵ月半後の12月に健康ニュースを発行した。

結果および考察：児童と仲間を対象にした計画的行動理論に基づいた教育方法は「やる気」が生まれ食生活改善の促進につながりうる。

1. 健康教育「からだ探検ゲーム」、「たべものゲーム」では、15問の1回目正解率59.7%が最後の復習では100%正解となった。食事、運動等の必要性の正解率は高いが、ポテトチップスの油の量、睡眠時間、運動量など行動に必要な技術の正解率は低い。
2. 食事中に使える英語ゲームでは、21グループ全問正解で「うれしい家でもやってみる」「お姉さんの発音がきれいで私もがんばりたい」と「やる気」の感想が多い。
3. 児童、仲間（父母約64%、兄弟姉妹ほか36%）のアンケート結果では、9月（回収率100%）より2月（回収率98%）は児童、仲間共に朝食を食べる人が増え、昼夜のおかずでは肉が減り、夜は大豆・納豆類が増え、野菜の種類も多い傾向で食事バランスが改善した。これは、児童と仲間が食事内容について対話をし、協同して改善したことが伺える。
4. 外出後の手洗いは、石鹸で手を洗う児童、仲間が約60%いる。睡眠、便の回数も改善傾向にあるが、児童の便秘（週3回以下の排便）が全国調査と比較すると多い。
5. 汗をかくような運動や遊びや仕事は、冬場である2月でも児童は97%しているが、回数は9月より減っている。仲間は「しない」が2月27.2%、9月22.9%と冬は運動をしない、運動回数が減る傾向にある。児童は仲間より運動等を良くしている。
6. 参加学生のアンケートでは、自分の役にたったが半数、また参加したいが多かった。

キーワード：学生の教育機能、児童と仲間、食事と運動、保健行動、やる気、対話と協同

*¹ 鹿児島純心女子大学看護栄養学部看護学科

*² 同健康栄養学科

*³ 国際人間学部英語コミュニケーション学科

*⁴ 前同こども学科

*⁵ 取組分野：文部科学省の「食に関する指導体制の整備について」「子どもの体力向上のための総合的な方策について」、厚生労働省の健康日本21の目標領域である栄養・食生活および身体活動・運動など選定した。

緒 言

2004（平成16）年2月17日鹿児島純心女子大学（以下「大学」という）では、地域と大学を結び、地域を生かした特色ある教育プログラムの開発を推進し、教育効果を高める事業の実施が決定した。そこで担当した我々は、学生の教育効果を上げるために4つの段階を視点にプログラム開発にあたった。第1に指導者側が正しい知識を習得する。第2にその知識を効果的に伝える技術をもつ。第3に適切な支援の方法をもつ。第4に健康教育の効果を正確に評価する能力をもつこと¹⁾²⁾とした。留意点として各学科生が学んでいることを生かし4学科が分担する。また、生活習慣病の予防を視点に、生活習慣が確立時期にある小学4年生（以下「児童」という）と生活習慣病が出始める親世代30・40歳代を事業対象と定めた。

事業目的としては、児童や仲間（家族）が食事、運動などに対する正しい知識を身につけ健康づくりを促進することができる*5とした。そのために学生ボランティア（以下「学生」という）を指導し、その学生が児童を対象に協同学習の健康教育等を実施する。児童は、健康づくりの2人の仲間（以下「仲間」という）を見つけその知識を仲間に伝え、お互いに健康行動への「やる気」を起こしポジティブな気持ちで健康行動を継続する。学生、児童、仲間の協同の教育効果をねらった。

健康づくりを促進する理論としては、計画的行動理論の「やる気」の3条件である「行動への態度」、「主観的規範」、「行動コントロール感」の視点から考察する。また、学生の教育効果の視点から教育プログラム開発の経過、内容および結果を分析する。

方法および内容

1. 健康教育

日時：2004（平成16）年9月25日(土)

時間：9時55分～12時

場所：小学校体育館

参加者：児童105人（5人組21グループ）、教員9人、保護者16人、学生60人、職員13人

プログラム：児童5人と学生1人がゲーム形式で健康づくりについて協同学習する。

順	内 容	担当学科
1	あいさつ、オリエンテーション	
2	ウォーミングアップ、リズムダンス、人数合わせ児童5人	こども学科
3	からだ探検ゲーム (5人組 答え1・2・3を体で表現)	看護学科
4	たべものゲーム (5人組 答え1・2・3を体で表現)	健康栄養学科
5	英語でサラダ作っちゃえ (5人組の21グループ対抗) 紙の大皿に英語カード5種類選んでサラダを作る。英語カードと絵カードを合わせる。選んだものを群に分けてバランス合わせをする。バランス評価。	国際人間学科
6	食事もバランス、からだもバランス、本日の復習	健康栄養学科
7	ストレッチ体操、記録のしかた、おわりのあいさつ	こども学科

学生の役割分担

本学の学科（学年）	取り組み分野
国際人間学科（3・4年）	英語で交流 (食事や料理で使える英語)
こども学科（3年）	運動・レクリエーション (リズムダンス)
看護学科（2年）	食事・運動・睡眠・排便・手洗いなどの知識、必要性
健康栄養学科（3年）	栄養・食生活の知識

2. 健康行動アンケート

児童および仲間の健康教育実施前、実施後5ヵ月目の健康行動アンケートを、2004（平成16）年9月16日および2005（平成17）年2月25日に実施した。

3. 児童と仲間を対象に健康ニュースを12月に発行【資料1】

4. 評価：健康教育内容の理解状況：指導中の正解率と最後の復習の正解率の差で評価。健康行動アンケート結果で生活習慣の改善状況の評価。4年生と対象群3・6年生の風邪の罹患状況で評価（平成17・18年1月分）。参加学生のアンケート結果から教育効果の評価。

仮説および言葉の定義

計画的行動理論はAjzenの理論で、人が「近い将来に、その行動をしよう」と思う「やる気」と行動の関係を表す理論である³⁾。そのためこのプログラムでは、「やる気」が生まれる条件、1)健康に高い価値を持ち、その行動が健康をもたらすと強く信じる「行動への態度」として健康教育、健康行動アンケート、健康ニュースの発行、2)児童や仲間が、大切な人（児童は仲間や学生、仲間は児童）の気持ちに従い行動すべきと強く思う「主観的規範」として児童と仲間と大学生、3)本人がその行動に必要な技術や資源を持ち行動が簡単にできると強く思う「行動コントロール感」のために協同学習での健康教育、仲間との対話を設定した。この3つが影響しあい「やる気」である「行動意思」が生まれ健康になるために生活改善することを「健康づくり」と定義し促進するとした。

結 果

1 『川内市の健康生活ーこどもと学生で創る健康づくりー』健康教育

1)「からだ探検ゲーム」「たべものゲーム」は、5人組の21グループで実施した。10秒間考えてグループで答えを決めて解答してもらった。1回目実施時の正解率は59.7%であった

ものが、最後の復習では21グループ100%の正解率となった。

最初で正解率が高かったのは、「元気な体をつくる食べ方」100%、「成長のために良い遊び」95%、「丈夫な骨はどうしてできる」,「ビタミンってなあに」85%、「運動後の飲み物は何かいい」80%、「1日のうんこの量は」75%で健康のために何が必要かは理解している。半面、「運動をする時間はいつがいい」,「呼吸は1時間に何回する」,「体の水分はどれくらい」は65%である。「ポテトチップスに含まれる油はどれくらい」,「畑の肉とは何でしょう」は50%で正しい知識は半分程度の正解率となる。

正解率が低いのは、「こどもの1日の歩数の目安は」,「みんなに必要な睡眠時間は」10%で、「長い骨はどこから伸びる」,「血液はどれくらいで体をひとまわりする」30%より低い。歩数は少なく、睡眠時間は短く捉えており、必要な技術が不足している。

健康教育への児童の参加態度は真剣でかつ5人がよく協力し合い楽しく参加した。

学生の進行もよく時間どおりに終了した。2)学生は、夏休みを利用し2回のリハーサルを実施した。役割分担、媒体作成も実施前日まで要した。役割は学科で分担し、進行、実施は学生に全面的にまかせ担当職員はアシスタントに回った。楽しく実施するために、最初と最後はリズムダンスを導入した。

内容はゲーム形式とした。問題提出方法は、サイコドラマをつくりシナリオに従って実演する表現方法の教育効果も考慮した。ゲームの解答方法は10秒間5人の児童で考え、1は座ったまま右手をあげる。2は座ったまま両手を上げる。3は全員立ち上がる体現法とした。その後正解をいい、解答を会場全体で共

有して結果をアシスタントの学生が記録していった。同様に復習時の解答結果も記録し、前後を比較し評価した。

学生アンケートでは、学生自身が「役立った」は50%であった。機会があればまた参加したい学生は全数に近いが、実習等もあり大変だとの回答も3名あった。このことは、4学科の調整が難しくリハーサル参加率が、約70%であったことからもうかがえる。その後の学生の参加は、授業や実習で困難であり、今回は健康教育の実施のみとなった。

2 「こどもと学生で創る健康づくりアンケート」結果

期 日：1回目 2004（平成16）年9月16日
健康教育実施前の状況（回収率100%）

2回目 2005（平成17）年2月25日実施後
5ヵ月目の状況（回収率98%）

対象者：1回目 児童105人と仲間210人（内訳父54人、母80人、祖母3人、おじ1人、おば1人、兄10人、姉20人、弟19人、妹11人、未記入11人）

2回目 児童103人と仲間206人（内訳父50人、母81人、祖母2人、祖父1人、兄12人、姉19人、弟22人、妹14人、未記入5人）

児童と仲間の健康生活状況は、以下のとおりで11項目について9月と2月の割合を出し、2つの割合の差の検定を行い、 $P<0.05$ を有意とした。

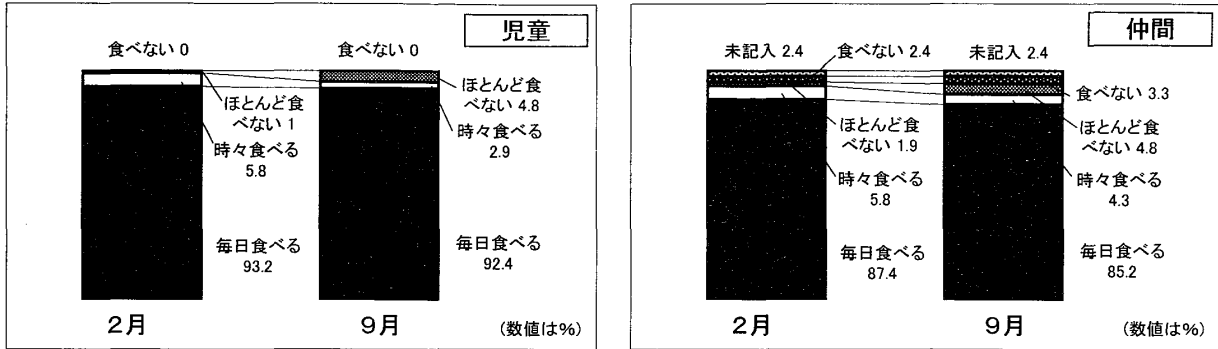
結果は図1のとおりで、2月は朝ごはんをバランスよく食べる児童、仲間が増える傾向にある。おかずでは、肉が減り大豆・納豆類が多くなり、野菜は多くの種類を食べようになっている。特に昼のおかずでは、仲間では肉が減り（ $P<0.01$ ）、野菜を3種類・4種類以上食べるが増え（ $P<0.01$ ）、夜のおかず



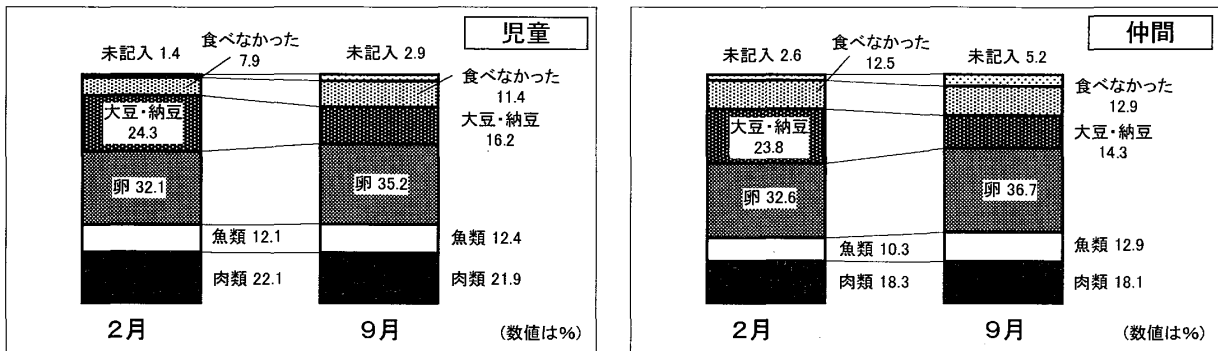
図1 児童と仲間2人の健康生活状況

平成16年9月 平成17年2月調査

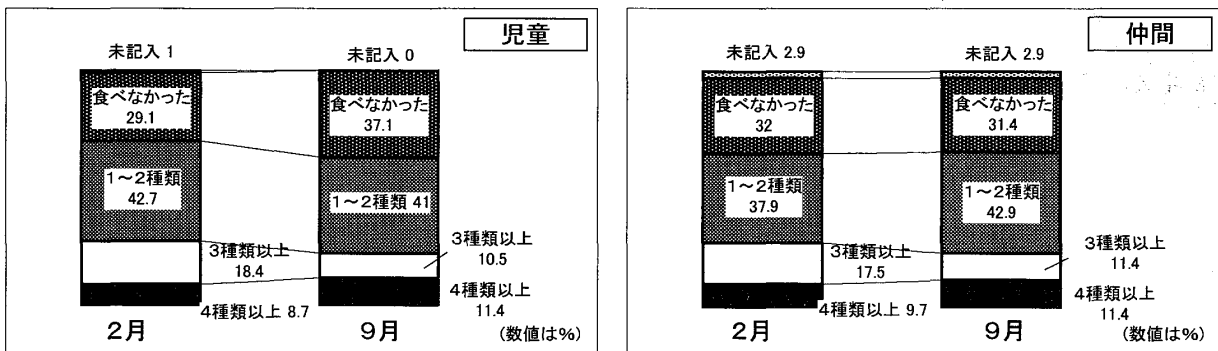
1. 朝ごはんを食べていますか



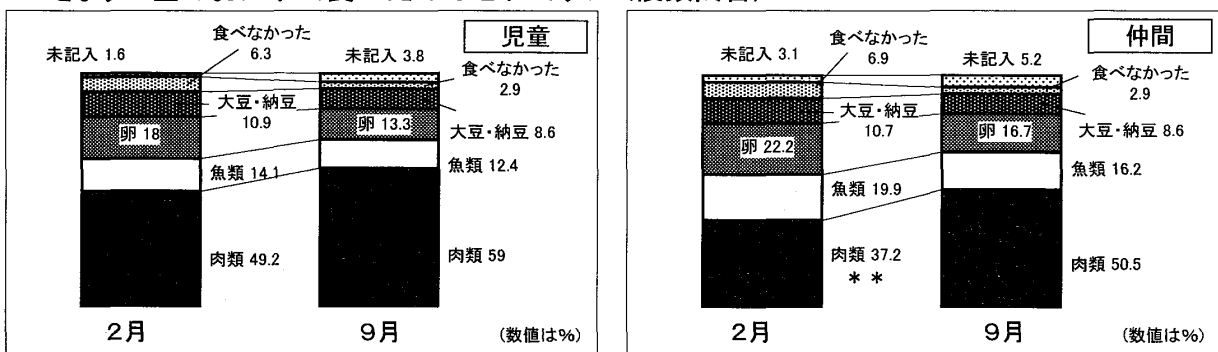
2. きょうの朝のおかずで食べたのはどれですか (複数回答)



3. 朝ごはん野菜を何種類食べましたか

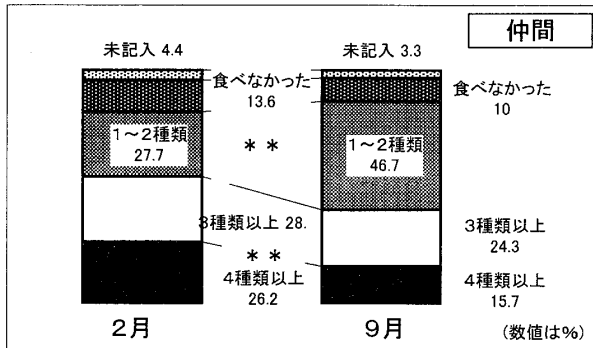
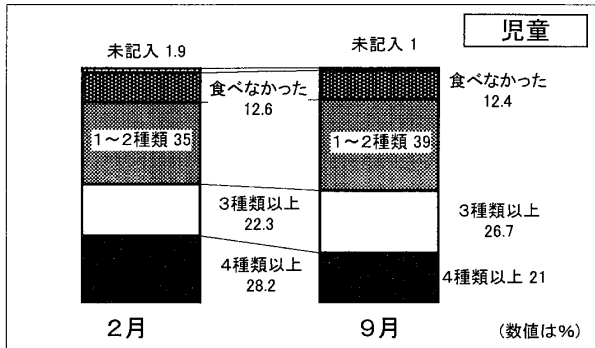


4. きょうの昼のおかずで食べたのはどれですか (複数回答)

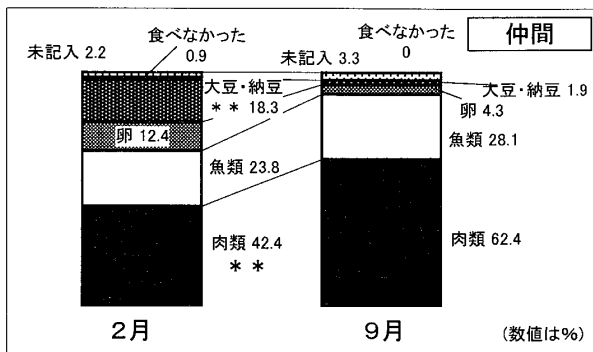
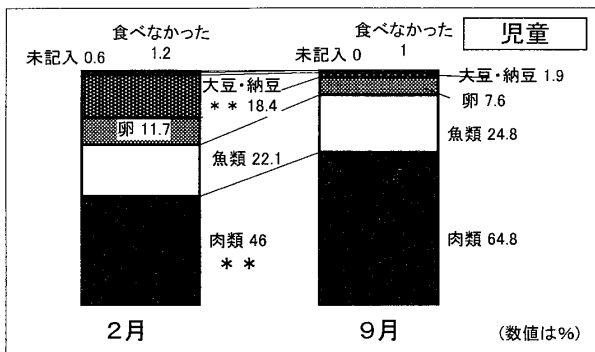


P<0.05* P<0.01** で表示

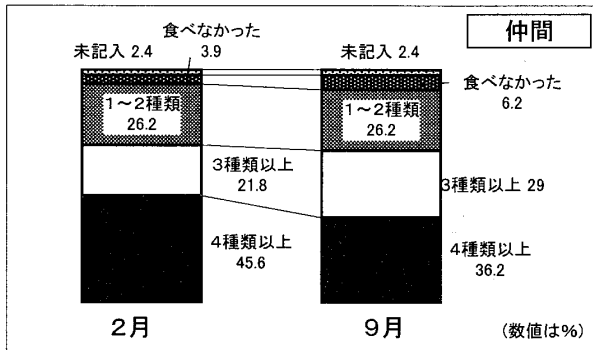
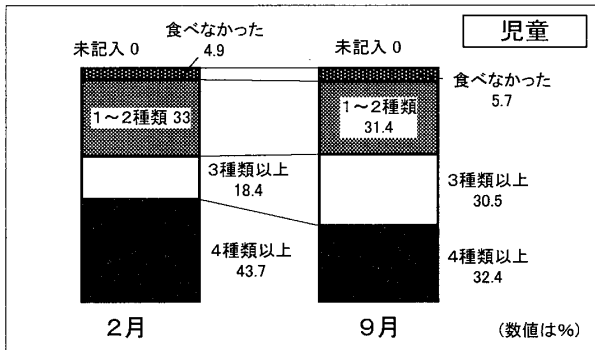
5. 昼ごはんでは野菜を何種類食べましたか



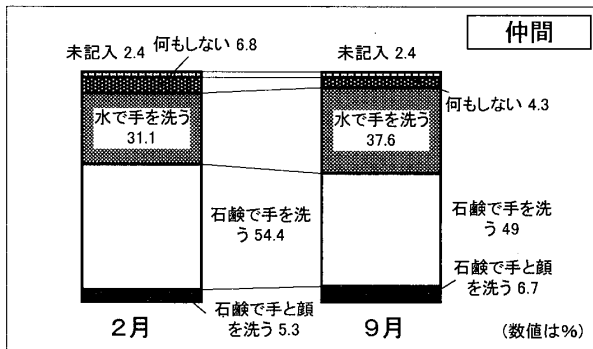
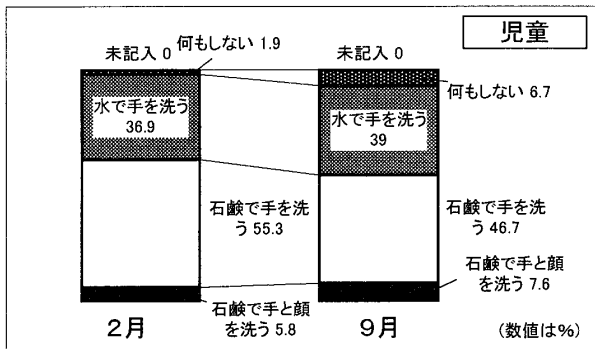
6. きょうの夜のおかずで食べたのはどれですか (複数回答)



7. 夜ごはんでは野菜を何種類食べましたか

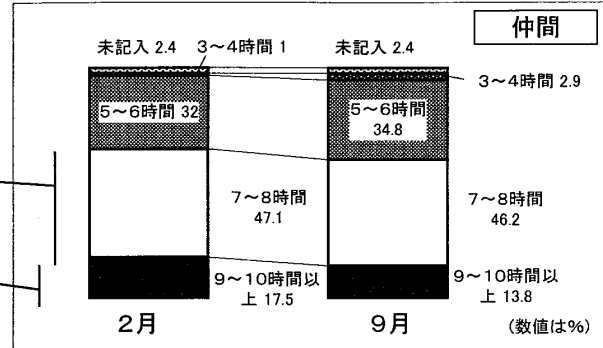
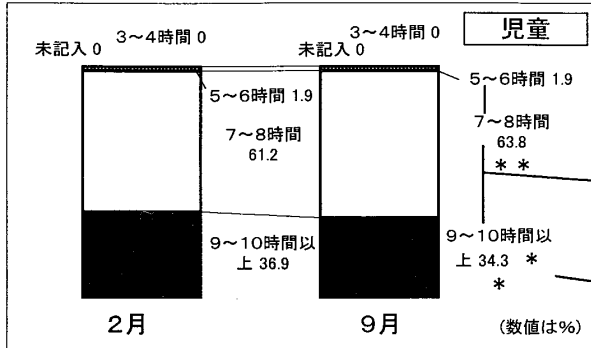


8. 外から帰ってきた時の手洗いなどは

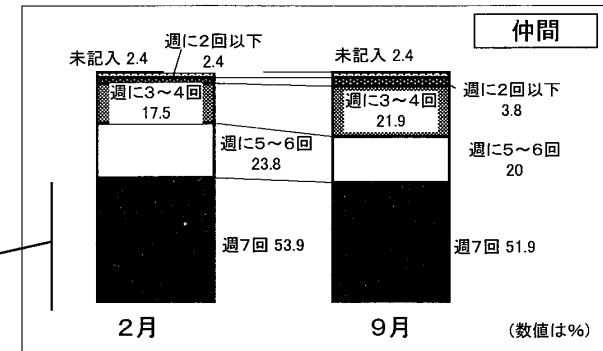
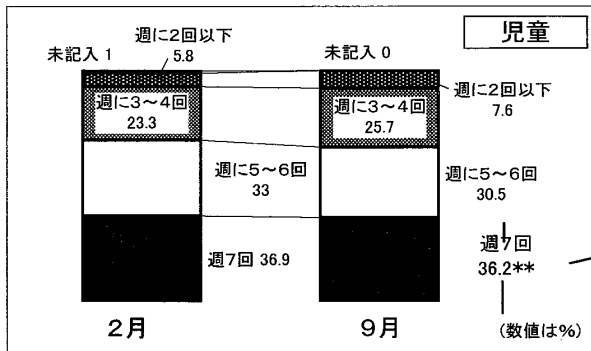


P<0.05* P<0.01**で表示

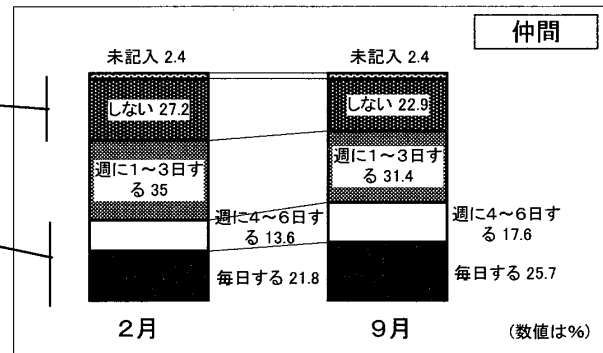
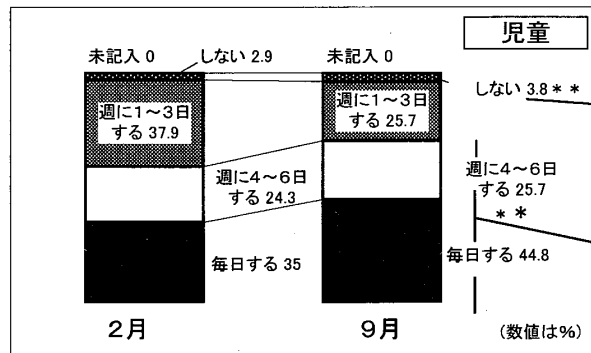
9. 睡眠時間は、1日何時間ぐらいですか



10. 1週間の便の回数は何回ですか



11. 汗をかくような運動や遊びや仕事をしますか



P<0.05* P<0.01** で表示

では、児童、仲間共に肉が減り (P<0.01)、大豆・納豆類 (P<0.01) が増え、野菜は種類を多くとる傾向で食事バランスが改善している。しかし、食事の改善率で悪いのは、朝ごはん野菜を「たべなかった」が、児童、仲間共に約30%ある。

外出後の手洗いは、2月児童98.1%、仲間

90.8%が実施し、内石鹸で手を洗う児童、仲間は冬でも約60%あり改善傾向にある。あまり変化がなかったのは、睡眠時間および便の回数であった。排便週3回以下を便秘とすると、児童は9月7.6%、2月5.8%であり、2004(平成16)年「国民生活基礎調査」便秘5~14歳の人口10万対5.3と比較すると本調査の児童

は58となり便秘が多い⁴⁾。また、児童は仲間より週7回排便するものは少ない ($P<0.01$)。

また、汗をかくような運動や遊びや仕事は、9月、2月とも児童は97.1%しているが、2月は9月より回数が減る傾向にある。仲間と児童を比較すると、仲間は児童より運動等の実施、回数共に少ない ($P<0.01$)。しかし、2003 (平成15) 年「国民健康・栄養調査」での1回30分以上、週2回以上の運動を1年以上している運動習慣者は、男29.3%、女24.1%と少ない⁴⁾。汗をかくような運動を30分以上したと仮定し、週2回以上は同じとして、5ヵ月間していることを今後1年間継続すると仮定してみると、仲間の中で運動するは50%を超えており運動実施率は高いと評価できる。しかし、島岡の研究にもあるように運動は習慣化が難しく、目に見える結果や実感がなければ「やる気」は低迷してくる⁵⁾ことから低下が懸念される。また、本事業から冬は運動の実施や回数が減るといえる。

全体を概観すると、児童は健康教育の知識や技術を仲間に伝え児童も仲間も「やる気」

を出し食生活を改善し健康づくりが促進されたことがアンケート結果から推測できる。しかし、運動は実施回数が減っていたことから促進する結果に至らなかった。

3 計画的行動理論からみた健康づくり事業の評価

我々は、議論の中で、今回の健康づくりを促進する事業を、図2のように捉えた。

図2は、縦軸に「やる気」定着度、横軸に時間をとっている。つまり、我々の「健康づくり」の定義は、『その人が健康に良いと「やる気」を出し行動開始された事象が、日常化されるまでのプロセス』といえる。また、『当初は非日常的であった健康行動事象が一過性でなく、日常生活に定着・継続・定常化することによって、その人の健康行動事象は日常的な生活習慣となる。』従って『1年以上継続して成功した健康づくりは、最終的には健康な生活習慣となったものと定義』できる。さらに『健康行動事象を学校単位、地域単位で実施し、定着・継続・定常化することによ

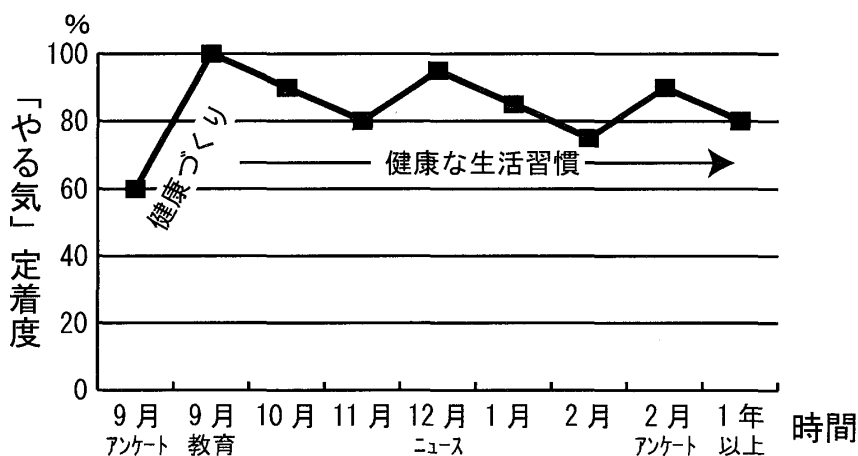


図2 やる気と健康づくりの関係

注：10・11・1月の仮定値は、2005年の岩間、野村、福山、徳永、小安の調査の「やる気」1ヵ月間の減少率約10%を使用した。また、12・2月は、同調査の調査介入改善率約15%を使用した⁶⁾。

て、その事象はその地域の日常的な健康文化になったものと定義』できると捉えた。

そこで今回の事業を、得られた数値から計画的行動理論の「やる気」で概念化して時間軸にそって予測して図式化すると図2のようになる。9月の実施前の「やる気」を1回目正解率59.7%と仮定する。次に協同学習での健康教育、学生および児童同士との対話で得た健康教育での正解率100%を「やる気」に置き換えてみる。そうすると「やる気」の3条件である「行動への態度」、「主観的規範」、「行動コントロール感」は一気に高められたと仮定できる。さらに、全問正解という充実感仲間（家族）との対話になり仲間の「やる気」も高めたと予測できる。しかし、時間の経過と共に「やる気」や健康行動は漸次低下し継続は難しい²⁾。その低下に対しこの事業では、2ヵ月半後に健康ニュースを発行し「行動への態度」、「行動コントロール感」を刺激し再度高めようとした。

また、定着と継続のためには仲間を「主観的規範」として設定した。事業開始5ヵ月後の健康行動アンケートで食事バランスの生活習慣の改善が見られた。しかし、冬である2月は汗をかくような運動、遊び等の回数が減り運動習慣改善はみられなかった。このことは、先行文献で「行動への態度」、「主観的規範」、「行動コントロール感」を持つ人ほど運動を行うという「行動意思」を有意に高く持っていたという研究もある³⁾が、運動等の行動は季節にも左右されると考えられる。

以上のことから、今回の児童と仲間を対象にした計画的行動理論に基づいた教育方法は「やる気」が生まれ食生活改善による健康づくりの促進につながりうると評価できる。しかし、運動習慣の改善にはつながらなかった。

4 児童の風邪の罹患率評価はできなかった。

考 察

結果より、計画的行動理論の「やる気」が生まれる3条件を視点に、本事業は企画した。児童・仲間共に、3食バランスよく食べる食生活改善には結びついたが、汗ばむ運動や遊び等を週4日以上する運動習慣の改善にはつながらなかった。運動習慣改善にはもう一段階の事業工夫が必要であろう。

1)「行動への態度」の事業としては、健康教育、健康教育実施前と5ヵ月後に健康行動アンケートおよび2ヵ月半後に健康ニュースを発行した。アンケートおよび健康ニュースは、児童の教育水準に合わせた使用漢字の選択と大学名などには、ふりがなを付け児童が仲間に説明しながらアンケートを実施することにより対話が行われる事を想定した。

その結果、児童および仲間共に健康に高い価値を見出し、3食バランスよく食べる食生活改善に結びついた。

2)「主観的規範」として児童と仲間を設定した。また、健康教育場面では学生が分かりやすく児童に解説し、ゲームのアシスタントを努め実行への規範を強めた。このことから児童と仲間は共に行動すべきと強く感じ、その気持ちに従い健康行動が継続したと推測する。児童以上に仲間の食事の改善が大きい。

3)「行動コントロール感」を高めるために、健康教育では5人の児童の協同学習とした。ゲームの正解率が、1回目59.7%が最後の復習では100%になり、また、英語でサラダを作るゲームでは、21チームが全問正解となり児童が達成感と自信を持ったと推測できる。児童は、ゲームで得た知識や技術を家族である仲間との対話で伝達し、2ヵ月半後の健康ニュー

スで確認をしあったことで家族も知識や技術を得たと推測できる。

その評価であるアンケートが冬であったため、食生活改善は継続していたが、しかし、石鹸での手洗い等の行動はやや増加したものの、児童の運動等はしているが、回数が減少していた。また、仲間は運動等の実施、回数ともに減少傾向がみられた。運動行動の「やる気」を高めるためには、先行文献では、万歩計をつけ毎日の歩数を記録し、3週間おきに自覚症状を記録する方法^{6),7),8)}や改善へのアドバイス^{2),6)}が効果的とのべている。今企画でも、試案としたが予算や作業限界との関係で実行に至らなかった。

以上の3つが影響しあい「やる気」である「行動意思」が生まれ行動変容したことは、児童および仲間共に、食生活改善のアンケート結果からいえる。今回の小学生と30・40歳代の親世代の家族が対話と協同した健康づくりをする事業は効果的と評価できる。

一方、学生への教育目標とした、指導者側が正しい知識を習得し、その知識を効果的に伝える技術や適切な支援の方法をもつために、学生が事業内容を担当する場面と他の学科が実施する時は、児童のアシスタントをする役割とを持たせた。またリハーサルは2回実施したが、学生は参加して自分自身にとって役立ったとしたものは50%であった。これは、アンケート項目の不備、健康教育の内容および効果予測を十分に学生に伝達し得なかった、担当し企画した教職員側の反省点でもある。

今回の事業では効果は見られたものの、10回の委員会のほか連絡等で人員と時間を要したため実施への工夫が必要である。また、事業内容に対象群を設定していなかった事、評価内容としたにもかかわらず、アンケート内

容に1ヵ月間の風邪の罹患状況および1日の歯みがき回数の不備、さらに維持期確認のためには、1年後に同様のアンケートで評価が必要であった。

謝 辞

今回、事業実施に対し全面的に御協力いただきました、小学校の4年生、その仲間となってくださいましたご家族の皆様および教職員の皆様、ボランティアとして参加いただいた学生の皆様に心から感謝いたします。

【引用文献】

- 1) 上島弘嗣, 岡山 明: コレステロールを下げる健康教育, 保健同人, 2000, 3ページ.
- 2) 光橋悦子, 李 延秀, 川久保清: 短期減量指導プログラム実施後の体重変化と生活習慣要因の関連, 日本公衆衛生誌, 2003, 50ページ, 136-145ページ.
- 3) 松本千秋: 医療・保健スタッフのための健康行動理論の基礎, 医歯薬出版株式会社, 2002, 37-46ページ, 44ページ.
- 4) 財団法人厚生統計協会, 国民衛生の動向・厚生 の指標 臨時増刊・第52巻9号通巻第816号, 株式会社廣濟堂, 2005, 406ページ, 76-87ページ.
- 5) 島岡 清: イラストでみる健康づくり運動指導～保健師・栄養士・健康づくり指導者のために～, 有限会社市村出版, 2001, 30ページ.
- 6) 岩間, 野村, 福山, 徳永, 小安: 血管年齢測定値の呈示と運動行動へのやる気との関係性, 鹿児島純心女子大学看護研究集, 2005, 5-資料1, 5-1ページ.
- 7) 小林修平: 食品・栄養・健康ニューガイ

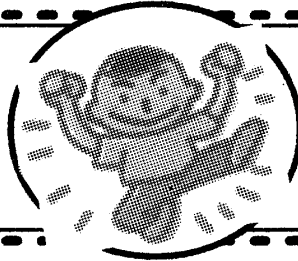
ドシリーズ健康増進のための運動ガイド,
第一出版株式会社, 1991, 67ページ.

8) 日野原茂雄, 和田高士: エキスパートか
ら学ぶ健康教育・栄養相談・生活習慣改善

指導～生活習慣病の予防と管理～, 株式会
社ライフ・サイエンス・センター, 2003,
211ページ.

【資料1】健康ニュース

平佐西小学校4年生と
健康づくりの仲間の皆様
お元気ですか。



平成16年11月
鹿児島純心女子大学

冬に向かって風邪にも負けずに元気ですか。
9月25日のゲームの内容を仲間といっしょに実行していますか。
今日は簡単な風邪予防と合わせて、仲間といっしょに、9月25日の内容を復習して、休まず健康づくりを続けましょう。

風邪予防はできていますか？
風邪の菌は、会話、咳、くしゃみやそれが手について口から入りうつります。
だから、石鹸での手洗いやうがい、体力、インフルエンザの予防接種などが有効です。
寒くなったら、マスクや首を冷やさない洋服やマフラーなどの工夫もいいですよ。

からだ探検ゲーム・たべものゲームおぼえているかな？

- 1 丈夫な骨は、ごはん、たまご、肉、魚、大豆製品、野菜、牛乳などいろいろ食べて外で運動すると、動かしている骨が丈夫になるのだったね。実行していますか。
- 2 呼吸は普通の時、1時間に子どもは1200回、おとなは900回くらいです。食後の歯磨き、うがいをして口の中をきれいにしないと風邪をひきやすくなるよ。
- 3 成長のためによい遊びは、楽しい遊びを長く続けるのがよかったよね。ご飯の後1時間してから運動するのがよかったけど、寒くても実行していますか。
- 4 こどもの1日の歩数は約2万歩、大人は約1万歩、高齢者でも5千歩以上歩いたほうが健康にいいよ。今より10分多く歩くことや、動くことから始めよう。
- 5 運動して汗をかいたら、水やお茶、麦茶で水分を取ることが大切だったね。牛乳も1日1本から2本は飲んだほうがいいよ。
- 6 1日のうんこの量は、バナナ1本くらいだったね。たくさん食べる子は、バナナ2本くらいでかな。野菜や海藻などが少ないと硬いうんこになるのだったね。うんこが毎日出ると、元気になるし、がんにもなりにくいことを仲間にも教えてね。
- 7 みんなに必要な睡眠時間は10時間位だったね。寝ているときに成長ホルモンが出て成長するのだったけど、お風呂に入って疲れをとってよく眠っているかな。
- 8 燻の肉と言われるのは、大豆だったね。豆腐、納豆、豆乳、大豆の煮豆などをいろいろな料理で食べましょう。
- 9 ポテトチップス一袋の油は、重さの3分の1あります。50g一袋を食べると、これだけで1日分の油をとることになるよ。食べすぎに注意しよう。
- 10 野菜などにあるビタミンは、食べ物が体の中で働くところ、野菜を1食に両手一杯ぐらいつく食べようね。

どれくらい覚えていたかな。続けることが大切だよ。元気な体で夢をかなえよう。

【資料2】

『川内市の健康生活—こどもと学生で創る健康づくり—』経過 地域と結ぶ教育開発推進委員会

項	期 日	内 容
1	16年2月17日(火)	地域と結ぶ教育開発推進委員会についての説明会, 学部長会より
2	3月16日(火)	第1回委員会 ①委員会に必要なもの ②今後の進め方および学長依頼の趣旨の確認
3	4月6日(火)	第2回委員会 ①企画書の留意事項について ②企画内容について
4	4月20日(火)	第3回委員会 ①本プロジェクトについての確認 ②実施日程の調整 ③各学科の内容確認 ④対象 ⑤参加学生 ⑥今後の進め方
5	6月1日(火)	第4回委員会 ①「川内市の健康生活—こどもと学生で創る健康づくりプログラム—」の名称および具体的内容について
6	6月14日(月)	川内市教育委員会教育長を訪問 企画の説明 平佐西小学校 校長先生・教頭先生に企画の説明
7	6月22日(火)	第5回委員会 ①川内市との交渉結果報告 ②具体的内容の検討 ③今後の業務 ④学生指導について
8	7月6日(火)	第6回委員会スタッフ会 ①進捗状況 ②通知書類, アンケート作成分担 ③各学科学生の募集, リハーサルの方法
9	夏季休業期間中	アンケート用紙の作成, 各学科のシナリオ, 提示物等の作成, 各学科リハーサルなど
10	8月12日(木)	小学校 教頭先生・養護教諭と打合せ ①4年生全員と保護者の希望者で実施 ②アンケート用紙を9月初旬に配布し回収を依頼
11	9月2日(木)	小学校 校長先生・教頭先生と打合せ ①正式文書による企画の説明 ②アンケートの依頼 ③会場の機器設備についての確認 川内市教育委員会教育長へ正式文書の送付
12	9月2日(木)	第7回委員会スタッフ会 ①進捗状況 ②学生のボランティア数確認, 分担 ③必要物品 ④当日とリハーサルの日程, 方法の確認 ⑤人員配置
13	9月16日(木)	アンケートの実施回収と集計作業
14	9月23日(木)	第8回委員会スタッフ会 ①リハーサルの流れ ②リハーサルの役割分担, 当日の役割分担 ③学生担当グループの分担 ④当日評価表作成
15	9月23日(木)	参加学生によるリハーサル (江角ホールラウンジ) 14:00~16:30
16	9月25日(土)	健康教育 9:30集合 9:55~12:00
17	10月6日(水)	第9回委員会 ①現在までの経過報告および実施の反省 ②今後の業務分担
18	11月29日(月)	小学校にアンケート結果報告とニュース配布依頼
19	17年2月16日(水)	小学校の教頭先生に2月中旬に第2回目アンケートを配布し回収することを依頼
20	2月28日(月)	2月25日実施のアンケートの回収と集計作業
21	3月23日(水)	小学校にアンケート結果報告
22	3月28日(月)	第10回委員会 ①第2回アンケート結果報告 ②委員会のまとめ

※ 委員会の他にワーキンググループによるミーティングを随時実施した。
この会は, 現代GP推進委員会に吸収され引き継がれることとなった。

The Health Care Project by Children and University Students Based on a Theory of Planned Behavior

Ryuko TOKUNAGA, Toshiko TAKE, Noriko KAWAKAMI, Fusako IWASAKI

Kagoshima Immaculate Heart University

Key Words : university students' educational function,
pupil and peer(the family), meals and exercise,
health care action, motivation,
sharing information and working together

Abstract

Recently, prevention of life-style related disease has been focused as a social health policy. The Immaculate Heart University students held a health education session for 105 4th grade pupils in September, 2004 and conducted a survey among them and their 210 parents on exercise and meals a week before the session and after 5 months. Also, health care paper was delivered the pupils in December. The project was aimed at promoting health care education and action from university students to each household through pupils, sharing information and working together in the family. The result is evaluated according to 3 conditions for creating motivation of planned behavior theory: attitudes toward actions, active self-care behavior and action-control.

As a result, the project created motivation for health care, which can lead to a healthy life-style.
